

39

趣味漢字抄

大正十五年九月
以降張三

特別
14
1919
388



1880
33

1919
33

寄附



代の... 女作

...



...

十一
十一
十一

...

門 15
號 1380
卷 39

門 14
號 1919
卷 39



坪内逍遙君と語る(一)

◎逍遙の昔ばなし

坪内君は常に自身の昔しを語らない、謂へらく昔しを云ふ様になつては發達が止まると。事實は逍遙意外に忘れッべく、半經し前のことを餘りよく覚えて居らぬと云ふて居る。一夕彼れが處女作

時代の昔話が出た。自分は此

當時から逍遙と知合つて居たから、話しの中には、自分の知つて居るものもあるが本人の話して記憶を新たにしたり事實も少なくない、中には腹を抱へて笑ふ様な話もある。

◎政治湯の執筆

逍遙が「春のや」の名を冠らせて一番先き

に世間に出したものは、まだ大學に居つた頃「政治湯」と云ふ題を(寧ろ欄名)設けて、連日東京輸入新聞の紙上に書いたのがはじめである。併し之れは小説ではない。逍遙此頃大學でライトケンに憲法の講義を聴て居る時分、憲法は珍らしい時節であつたから書き出したのである。麥湯を賣る屋臺店にいろ／＼の人間が腰を掛けて、憲法のはなしを聞く

と云ふ様な筋であつた。東京輸入新聞は前田健次郎が主宰して居つた新聞だ。或は高田(早苗博士)などの紹介で前田に頼み執筆することになつたのであらうが、しかとは分らない。此の政治湯を載せた新聞は坪内の家に藏してあるそうだ。

◎原稿料が甘圓

政治湯よりも早く出した處女作がある。それは坪内の名は隠してある原稿で、服部誠一(九春社長)に賣り飛ばしたのであるから、服部が少し手を入れ、作の順序をいくらか變へて別人の名で出した。或は服部の名であつたかも知らん。

これがレデー、ラフ、ゼー、レーキの翻譯で、東海散史の「佳人の奇遇」の様な書で譯したものであるが、高田も手傳つていくらか譯した處がある。天野(爲之助)も二三の詩を譯したと記憶して居る。確か原稿料が甘圓であつた。此原稿料は受取ると直に天麩

羅か何かになつた様であつた。此の本がいまはどうも見當らない、どうかして一冊得たいものであると逍遙は語つた。言ひ洩らしたが此の本は「春江奇縁」と云ふ名目で出版された。



坪内逍遙君と語る(二)

◎春窓綺談の出版

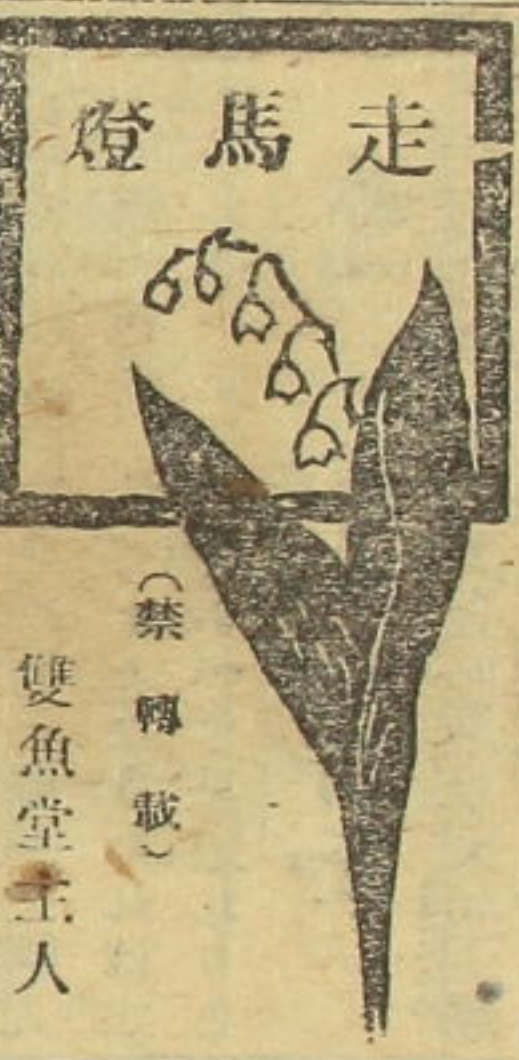
昭和十六年十月廿一日
市島謙吉氏贈

これより少しあとで矢張り他人の名で出版した翻譯ものが今ある。これはスロットの「ライオン」を譯したものであつて「春窓綺談」と云ふ名をつけた。此の時分リットンの「マルト」を譯したものがあつた。それに「春窓」云々と云ふやうな書名が附されてあつて、ひどく此の反譯小説が行はれたものである。それで逍遙も矢張り春の字を用ひ、春江奇縁だの春窓綺談のと同じ様な名を命じたのである。此の春窓綺談は馬琴風な筆で譯した。これは丸善で出版されたが、此時分逍遙はまだ自分の名で出すべからずと云ふ論で、進文學舎の橋健三の名で出した筈だ。此の書物も今は探しても容易に手に入らない、恐らく書名を記し居る人も無い位だらう。

◎書生氣質時代

以上は大學に在學中の作であるが、卒業して後出した一番最初の者は例の「當世書生氣質」である。これが本郷妻戀坂の晩堂と云ふ書店から出版さ

るとに至つた、誰れ因縁は坪内も能く居るに云ふて居るが、晩成堂の主人と云ふのは静岡邊の山師で、一時はなにか「羽振がよく、彼の淺草公園内の花屋敷を始めたのも此の人であるが、自分の娘を逍遙に嫁がせ度いなどと進んで逍遙の處女作を受込むに至つた。



◎坪内逍遙君と語る (三)

俗て此の小説が出ると新聞で悪評を書いたのが時事新報である、時事新報は當時ハイカラで、西洋かぶれにかぶれて居る新聞であるから、三馬流の筆を見て頗る不快に感じたと思つて、今ごろ三馬流と云ふのはかりの口吻で、あんな下卑た作者の筆にならひ、大學の書生が料理

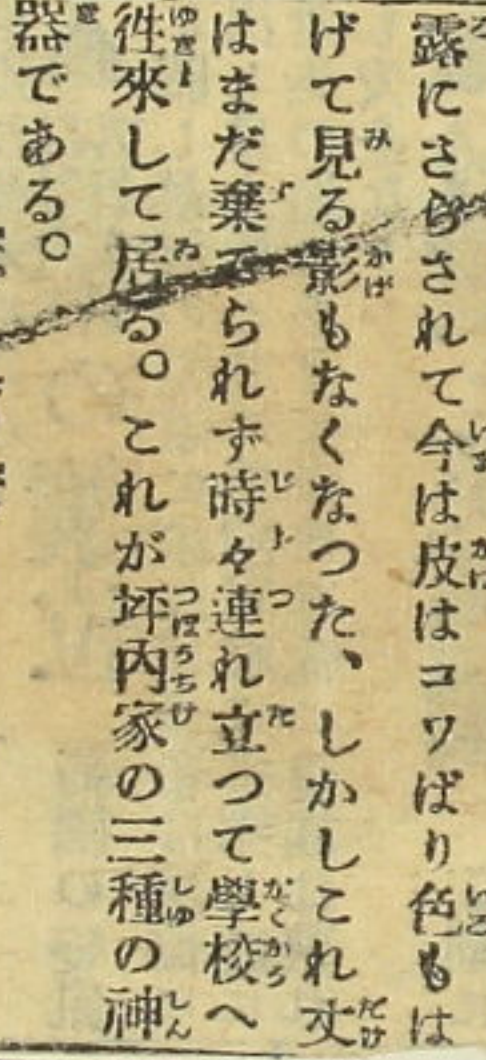
ハの四十八字を解する意であつたさうだ、即ち夫子自身は魯文であるから「ロ」であるが、自分なども、其の門に入つたならば、波文とか何とか云つたのかも知れんと笑す。



◎坪内家三種の神器

此頃坪内君夫妻と笑つたことであるが、坪内家には三種の神器と云はれて居るものがある。それは「んだ」と聞いて見たれば第一「蝙蝠」、第二「毛織子」、第三「扇」である。これは何十年東京専門學校お伴をしたもの。第二「朝鮮扇」、長の桐油を張りつけた様なもの、これが家康の扇の指物と同じく幾戦場を経たか知れない古物、坪内演説の場合に

はいつもこれを揮り廻はした。第三書物入カバン、これは最初随分立派なカバンであつたのが、これも傘と同じく學校へ長年お伴をするうちに、雨露にさらされて今は皮はコワバリ色もはげて見る影もなくなつた、しかしこれ文はまだ棄てられず時々連れ立って學校へ往來して居る。これが坪内家の三種の神器である。



◎外に重寶が三つ

處が此の外に坪内家の重寶がまだ三つある筈だと余より申出た。それは第一、省亭筆掛幅、月に櫻散亂の圖。第二、櫻花の散りたるを毛彫にせる象牙の烟管筒。第三、同じ意匠の詩繪の箸函である。これは皆春の屋おぼろに縁故ある古歌に基き、逍遙が龍岡町時代に作つたもので、實はコンナものを作つて當時は通がつて居つたのである。余が此の三種を尋ねた時、逍遙は「あれも舊惡全書と

年に遊んで、戯れたことなどを書くことは以ての外である。云ふ様な單刺の掛許を書いたので、坪内も黙過する譯に出来ない、自分が竊盜をした経験が無ければ、竊盜の事を描寫し得ないものかと云ふ様な辯駁を試みた。其辯駁の文体が気に入つたと云ふので、幾時か村が道つて来た、これが藝遊と交際初めであると逍遙は語る。

◎假名垣魯文の勢力

逍遙當時を追懐して曰く、あの時分作者として頭角をあらはして居つたものが二三あつたが、どうしても假名垣魯文が棟梁であつた。當時は作者にでもならうと思ふと矢張りむかしの作者のなした様に、誰れかの門に入なければならん様に思つて居つた。現に正直正太夫(故齋藤緑雨)なども矢張りその考に支配されて魯文の門に入つた。自分などはそんな氣はなかつたが、併し危険なことであつた。どんなはづみに、門人にひつぱり込れぬとも限らなかつたのだ。今から追懐すると棟梁として恐れざるを得ない。魯文は其門人に「イロ

同じ取扱をして居る」と笑つたが、夫人の云ふには、此の三種の内、烟管筒文は丁度逍遙が廢煙を決行する一ヶ月ほど前に紛失したさうな。



◎坪内逍遙君と語る (五)

逍遙曰く、余がまだ本郷初めに住んで居る頃である、ある日一人の客が来た、物の如く無頓着に通して應接して見ると小倉袴を穿いて汚れた衣類を着て居る老人で、役所の歸へりらしく腰に辨當をわざわざさむで居る、一風變つた處の男だ、對面の姿もそこ／＼に「實に感心した、ア、いかなうては……」と云ふ。此は余が讀賣新聞に書いた美術論を此先生見て、感心のあまりわざ／＼尋ね

らん

狩野芳

て来たのである。これは狩野芳... 崖で當時は書の大かとも知らなかつた

彼はそのうち午頃になつたから、食事は... 下さるなど、腰なる辨當を叩き、

悪るかつたからその事を云ふと、それは... ラッキョウを喰へば癒ると云ふ様な調子

で、如何にも天真爛漫な妙な男であつた... と道遙は話したが、芳峯は故雅邦の先輩

及ぶ處でなかつた。印の所か... 活人書を見る

何年頃であつたか、畫家榎田半吉の自宅... に催した新年會に招かれ、活人書の餘興

人の骨折の割合に面白味の薄いもので... である、有体に云へば随分智慧のない所作



雙魚堂主人... 坪内逍遙君と語

の演劇でタプロロー、ウエウアンと云ふ... がそれである。日本の演劇にも天地

の見えると云ふて、一人の男が立あが... て刀を揮りかさを女が立膝で動か

エウアンに當るので、斯る態度はな... 美観である爲めに、観客は其の態度

のみに見せるのであるが、男女いろ... の行装をしたものが行列して通るのを見

と、武骨男であらうと思はれるもあり... 美人であらうと想像されるのもあつて、

顔が見えないから焦心い感じはある... 顔が見えないから焦心い感じはあるけれ

どもなか／＼面白／＼顔にまで紅粉を施... 様な大さわざをする位ならば寧ろ芝居

を道るがよいのだ、一寸の座與なれば寧... る半身行列が面白くはあるまいか、兎に

角此趣向は日本的である。これは美濃の... 半身は幕で隠して腰から下

鯨肝録

○冬歳大隈侯吹町に爆彈の難に遭ふ... の夜、侯の自動車支關に着するや、婢

僕の出逢ふ平日の如し、侯例の如く亮... 爾として奥に入り一語爆彈の事に及ば

ず、夫人令嬢婢女皆な變を知らず、... して執事至通青雜踏を極め、奥座敷の

侯家を出るに當り初めて家人に告ぐる... 前夜の事を以てす、家族驚惶甚し

侯早く自動車に乗つて去る、後日侯... く當夜家族に變を報すれば、驚惶騒動

すべく爲めに余亦安眠を得可らず、翌... 物は露の大責を迎接するの日にして前

宵熟睡を要す、余の當夜家族に語ら... りし所以と、説き終つて平然たり。

○侯難難の翌朝訪て無事を祝す、... 接所に十數の新記者あり、余記者に

戯れて曰く、今朝の侯露の大責を迎接... するの日に、應接の辭令余略々知る、

請ふ君等に語らん、露の大責は前夜の... 事に及び、首相無事を祝さるべく、

而して其辭令は左の如くならん、... 露國に於ては前夜の椿事の如き敢て

事定めて閣下を驚かしたるならん... 天佑に依り御無難なりしは單り閣下

の幸のみにあらず... と、而して之れに對する侯の辭令は左

の如くなるべし... 謹んで御慰問の厚きを感謝す、但し

前夜の變余に於て敢て珍らしからず... 前年既に經驗あり、寧ろ遺憾なる

貴國が我兵器の利鈍を驗せらるゝ折... 柄、當夜の爆彈の終に炸裂せざりし

こと是れなり... と一座余の諛語を聴て哄然たり、余肅

然容を改めて曰く當夜侯に天佑無りせ... ば吾人如何んぞ此の諛語を弄するを得

んと、起つて衆と萬歳を唱ふ... 鯨肝録

○鎌倉時代に女流の禪機に通ずる者... 一二にして足らず。而して其行狀の最

も奇抜なるを慧春と爲す。慧春、容色... のり、故ありて三十に達するも嫁せず

目から顔を傷けて禪門に入る。一僧の... 懇懇するあり。慧春一日森嚴なる式に

臨み、禪人廣座の前に赤裸々となりて... 現はれ、戀する僧を呼びて恥かしめ終

に自ら焚火に投じて死す。慧春の傳と... して存する者これのみ。頃者池田大伍

潤色して一脚本を作る。蓋し佳作な... り。而して未段慧春大雅山より某寺に

便するの一段最も痛快な覺ふ。使を受... けたる寺、豫て慧春の尋常の尼にあ

ざるを知り萬一問答に負けては恥辱と... なし、一山擧げて尼に抗し之を逐は

んと擬す。慧春屈せず、終に山門に... け入る。一僧抑止せんとて曰く「吾

れに三尺の劍あり汝以て如何とす」... 春忽ち裳を掲げて前をあらはし「我

Handwritten notes and scribbles at the bottom of the page.

○熊本に遊びし時、赤松醫學士語る、熊本人の學丸、概して大なり、動もすれば垂下尺許に及ぶものあり。混浴場は宛然瓢箪の陳列場に似て奇觀なりと余其故を問ふ、曰くヒラリヤと云ふ風土病の所業なり、ヒラリヤはマラリヤに似て同じからず妙に兩性の股間を襲ひ男子に在りては學丸、女子に在りては陰唇を貫す。而して之を起すの媒介は蚊なりと、但し此病敢て熊本に限りてあるに非ず、唯だ此地に於て特に甚だしきを認むと。

○蚊に就て近來醫學界の研究に據れば、總じて人に近づくの蚊は雌性にて雄性は外に在り、雌性の特に人體に接近する所以は人血を攝取して胎兒を育まんとするに在り、而して夏時は蚊の妊娠期にて人血を要する時なりと。

○大徳寺の現住は超脱の高僧なり。友人湯淺半舟曾て訪ふて一夕話す。僧曰くさて、君と話すことの面白さ、君は俗人なりとも僧と語るよりも俗を離れて却つて興あり。就て語るべき一話あり。頃日田舎の人來り拙僧に質すに地獄へ行かぬ工夫やあると問ふ。拙僧答へらく、それは心配無用なり。今の

精底なし」と一喝し終に堂に上る、一山奈何ともする能はず。

地獄は僧を以つて満員を告ぐ、俗人を容るゝの餘地なしと、余半月に此話を九州行汽車中に聴く、聞き終りて隣席を顧みれば本願寺の高き位地にある某僧の在るに初めて氣付き、半月を顧みて窃かに一嘘を發す。

○明末支那常熟縣に毛晋原と云ふ人あり。汲古閣として好書家に知らる。北人十七史を刻するの外經書子類の佳版を遺るもの少なからず、而して版の亡びて傳はらざるものと内に四唐人集あり。偶々存亡考を讀むに左の興味ある一節を得たり曰く、

板已作新煮茶、相傳、毛子晋有一孫、性嗜茗飲、購得洞庭山碧蘿春茶、虞山玉壘泉水、獨思無恙新、因顧四唐人集版、而歎曰、以此作新煮茶、其味當倍佳也、遂按日劈燒之

既に佳茶佳水あり而して佳薪を闕く、故に父祖苦心の版を焚く、文學の風流の厄に罹る如斯、は珍なり。

號とせんと、余曰く五峰見必らず説あらん、但だ余曾て百水、百篇著はす、水に於て一日の長あり、余先づ君の爲めに名をばはん、謝水は雅く、拜水と改むるを可とす、拜石拜山ありと雖ども、未だ拜水を名とする人を聽かず、余の此名を選ぶ所以也と五峰可と爲す、孝牛之れより拜水を以て號とす。

○石塚松籟齒科の業に精し、余と舊あり、余社後に抵る毎に、松籟余の齋室を治す、或は遠路機械を携へ余の在所に就て手術を施すことあり、之れが爲め目を噴ふするも敢て意とせず嘗て汽車中齒痛を覺ふ、松籟特に長問より汽車に入り來り手術を施す、鐵車中此事あるは鐵道有史以來の椿事ならし、而して皆松籟の厚意に出づ、余去新瀉に同人に招かれ酒次此事を語り、繼に越後に來る毎に必らず一齒を失ふと云ふ、坐中の人余の漸やく老境に入るを見、擲揄して曰く君に年々抜く程の齒牙ありやと、一坐絶倒す。

換

(二十七)

○故井上侯爵所藏の骨董畫畫時價一千萬圓、侯晚年賣つて金に換へんと欲し米さすして莫す、侯の買却を思ひ立つや、侯の眷顧を受けたる豪商、心算かに畏怖す、思へらく侯の物買はされば怒に觸る、買うは可なり、不相應の高價に買はされば其怒に觸るを奈何せん、一時某財閥間に恐惶を起したるも故なしとせず、而して侯の果さざりしは此等の人々の倖と云ふべき歟、或

人云く侯の意氣を以つて當時遽かに一千萬圓の藏付を賣却することありしとせば、恐らく一時財界を攪亂せしならんと、或は然らん。

○日黒孝牛に招かれ、坂口五峰と南邊茶々に飲む、孝牛は吾郷冬時雪深く陽春の季節に到るも容易に融解せず、唯だ幸ひに室地を繞る一帯の河あり、春季高處に就き之を決すれば、一時氾濫、堆雪立どころに消ゆ、余牛素水の恩を謝す、思へらく謝水を以つて俳

○坪内逍遙熱海別荘の書室に掲げんとて、余に書幅を購はんことを求む、余物色すること二年終に大徳寺僧傳外禪師書する所の四字横書の一幅を獲り。文に曰く、無位真人と書も亦猶勳愛すべし。思へらく逍遙齋中の者と爲すに足ると、一節を副へて致致す。曰く此四字君を言ふに似たり。但だ如此き文字自から求むるは不可、人の贈を侍て初めて味あり。僕より贈る所以也と。

○林田思軒在世中明治協會席七屢々相見る、嘗て岡倉覺三宅に會す、偶々一人あり思軒に就て原稿を督促す、且日大雨盆を覆す、思軒曰く原稿昨作成る、唯だ朝來雨あり、金玉の稿を投郵し雨露に濡れしむるに忍びず、遲滞する所以なりと、思軒能文の人、而かも自覺甚しく往々人をして驚感せしむ、余の交つて且つ親しまざりし所以也

過

○初めて都會に出で新事物に驚駭し、時々失策を醸して、人の笑を博する者。世嘲つて赤毛布と云ふ、想ふに都門に在る者日常慣れて新しきを感じず、而して其の事物の珍らしく眼に映するは此の赤毛布に在りとす、彼等の東京に來るや宛かも異國に遊びたる如く、事々物々珍奇ならざるなし、吾等都門に在る者、此點に於て、赤毛布を羨む者也。

(三十)
○那翁の戦争二十年に涉り、歐洲諸國の費す所九十億圓に垂んとす、吾人史を讀み、嘗つて其巨費に嘆驚す、而して此の嘆驚せる巨費は今の世界戦争の軍費の半ヶ月分に過ぎず、今次戦争の規模想ふべく、又戦禍の大を見るべし。○今次の世界戦争に英國の一年に消費したる石油九百萬ガロ、即ち之を日本の石數に換算すれば約一千八百萬石に及ぶ、石油の需要の大、見るべし、石油の

油の用度向より多くなるも、潜航艇防備の爲め海洋に注ぐの量實に大也、蓋し石油を海洋に流すの結果、水上の者能く水下を透視し得ると共に、水下の者水上を透視し得ず、是れ此防備に石油を要する所以也。

○昨今都下書畫骨董の賣立を爲す者相踵ぐ、而して一回の賣上高十萬圓乃至三十萬圓に上る者珍らしからず、是れ伊達家の賣立其の例を示したるによると雖も、亦暴富家續出の結果たるや論なし、余戯れに曰く、各賣立毎に總賣上高の幾分を冥加金として、之れを伊達家に贈れ、而して更に幾分を戦亂の張本カイセルに献ぜよと、○頃日大阪の某骨董商、前茶會を催し其の珍藏の各器を席に列ぬ、蓋し茶會に藉り器を售らんとする也、一客席に於り其の茶器を購はんとし、試みに其價を問ふ、主人一器毎に價を云ふ、客目を傾けず、徐るに懷中より十萬圓の小切手を出して曰く、吾懷中今は唯だ此の小切手あるのみ、請ふ之れを以て價とせよ、過不及亦論する莫れと、方今成金者の爲す所抵ね如此し、

揮ふに齊しき題語を録す。曰く青曰く紅曰く緒、曰く黄、曰く緑、何んぞ色彩の多様なる、題識の妙は蓋し此邊に在り。

陳外幾百點の内尤も珍とすべきを其邑の音符一卷と爲す、此卷藤原貞敏の奥書あり、貞敏は入唐其邑を學び如來本邦に琵琶を教へたる人、實に斯道の祖なり、單に中唐の音符の存するのみにも珍とすべし、況んや當時入唐の人の手書なるに於てをや、此の卷伏見宮家の藏什なり。
○竹田、華山等三あり。而して何人も山陽を第一に推すに躊躇せず、曾つて友人所藏の山陽自畫水墨山水を觀る、其題詩に云く
家在青林紅樹灣 每憐山紫水明間
弄儂不貯緒黃綠 水墨唯描一色山
彼れは繪の具を用ゆる畫師に非ずと自から地步を占め、却つて幾種の彩筆を

○友人佐伯好郎支那の景教を研究することあり、曾つて其語を聞く、昔由教を説くものあり其説新教(プロテスタント)の所説に近し、此一派羅馬教(カソリック)に對し一派の自馬を逐はれ六朝の頃シヤを経て支那に入る支那に教を普及する手段として此一派支那に教を普及する手段として佛敎と同一す、其の一時成功したるは之れが故也、原來景教を耶蘇教と云ふとは大陽也、大日經の如き或は原を景教に發したるやも知る可らず、又景教の實印符を交又するの形象なり、景教は自力を説かず他力を説き而して妻帯を認む、親鸞真宗の礎を之れに採りたるかにも思はると、余景教碑の周邊に不明の文字多く刻しあるを問ふ、佐伯、英國留學中某學者に問ふて始めてシヤ語を以つて僧の名を列署したる者なることを知り得たりと答ふ。

○天隈侯を訪ふの日、詰次問ふて曰く侯と雖も憂悶の事無きにあらざるべし、而して曾て怒瀾憂色を見ざるは何んぞや、侯曰く余に一治法あり、憂憤の事萬事を廢して市ちに入浴す、温湯氣血を渾身に通じ、頭腦の充血を散す、是れ排悶解怒の一法なり、又曰く温浴憂憤を解く前はざる時は、浴一椀を傾けて白晝と雖も寢臥す、寢ぬれば忽ち無何有の郷に入り、人我皆忘る、是れ余が排悶法にして保壽法の一端なりと、余輩此の法術ながら倣ひ難きにあらす、唯だ憤悶の時一醉直ちに熟睡を得るは難し、侯に及び難きは是れ也。

○余の架中福地櫻痴の書簡數通を藏す皆な妻に與へたる者、各通手に托して泊を云々す、蓋し櫻痴居士遊蕩時代の消息也、而して書簡の一端に明朝車夫に托して新らしき積鼻禪を遣はせと書するを例とするは珍也、○過日東京音樂學校に多くの樂書を陳列し、衆庶の覽に供す、余も亦到り觀

鯨肝錄

東京翠原道人

(四)
○支那人に論畫絶句、論印絶句の著ること人多く知る、而して論景絶句の著人多く知らず、此書金石苑古泉苑の著者として金石界に隠れなき燕庭の著者す所、支那古今の貨幣を七絶を以て考論し、一部錢史とも見るべきもの愛錢家の一讀を値す、著者自ら三十年の苦心を詠じ卷尾に附す曰く
三十年心苦費萬羅 入手錙銖不厭多
嘉蔭移中無長物 尊榮伴我日摩挲
○友人松平康國、破天荒と號す、曾て其の意義を問ふ、松平笑つて曰く「一ペラ棒」といふことなりと、一説に曰く支那の進士及第より起れる俗語にて、天荒は天神の反對、天殃と云ふの義なり、其の困難を打破して登第すること乃ち破天荒なりと、知らず此説も或は「べら棒」の解釋と見るべき乎、暫らく記して簡推の教を俟つ。
○畫家白亭、楓湖と善し、楓湖家計に窮し貧亭に若干の金を借んことを需

○余に愛玩の石あり。常に机上の珍とす。中秋一夕田邊碧雲訪ひ来る。余石を示して名を請ひ目つ匣に一詩を題せんとを求む。碧雲直に銀絲石と名を命じ一詩を録す云々
銀漢無聲流入樓
絲々涼灑五更頭
迴看織女別時秋
莫是支機天上石
迴看織女別時秋
此石肌膚に幾條の白き線あり宛がら水
廉の如し。碧雲の銀絲と云ふは、
て七夕の故事を呼び起し終に支機の石
天上より人寰に落ち來ると爲す。流石
に詩人也。

鯨肝録

東京翠原道人

○坪内逍遙の別荘伊豆の熱海に在り。庭前一樹あり。枝幹書樓を蔽ふ。樹名を問へばネムの木と云ふ。ネムの木蓋し掖或は青雲と云ふ。狩谷皇之に掖齋の號ある又書齋文庫の藏記ある皆な庭

中此樹あるによる。此樹夜に入れば萬葉垂下し雲を垂るとに似たり。青雲の名ある所以歟。爾來逍遙を呼ぶにねむの舎主人と云ふ。且つ逍遙に戯る。夜半人眠るべくして眠らず、眠る可らざるの樹木却つて眠る。顛倒如何。逍遙云く敢て樹に睡眠の代理を頼まんとす。るにあらず。爰に植ゑたるは眞に偶然なりと。余曰く園中此樹眞に闕可らず、君宜しく此樹に學びて可也と。蓋し逍遙文筆に精神を勞し往々不眠症に陥るが故也。

○家別界に於て珍とする石は曰く田黄曰く田白支那人は一寸の田黄を以て一寸の金に比す。貴きこと知るべし。産地に就ては或は青田縣とし或は壽山とし未だ決する所あらず。而して總じて此石を凍石と云ふ。特徴は織緯の絶無なるに在り。此點其証に似たり。但し砥のごとく質堅硬ならず縹絲瑪瑙のごとき外観紅紅に酷似すれども前者に織緯あり。後者に無し。是れ鑑別の一法なり。礦物學者の説に據れば此等の石は石英斑岩の分解したるものにてソープストーン (Soap Stone) 云々と。

東京翠原道人

(四十一)
○支那の文、子の産れたるを舉子と云ふ。擧ぐと云ふと取上ぐるの意なる謂ふまでもなし、但し今の世子を産み落せば之れを取上るを必然の事となすと雖も、往昔蠻野の時代之れを取上げざりし時代ありしことを思はざる可らず、現に昔とは云はず我邦に於て、墮胎の盛んに行はれたる時あり、墮胎は子を擧るを欲せざる者なり、擧子は必竟文明の致したる語目。

○歐洲の大戦に壯丁の日に亡ぶ者幾萬を算す、戦争尙數年繼續せば二十歳以上六十歳以下の國民終に地を拂ふに至らん、而して剩す所の者老と幼と婦人のみ、然るに老と幼とは共に性慾上婦人と遠き者なり、戦後配給を有せざる婦人の癡狂する者或は歐洲全土に充満するに至らんか

鯨肝録

東京翠原道人

○未延道成日本鐵道會社の車役たりし、線路視察の爲東北地方に旅行す、中美女を見る、傍らに一客あり、長靴美袴の好男子なり、道成妬心動き密かに其の男子の婦人の同伴なるや否やを偵察し、漸やく其の然らざるを知り心を安んず、思へらく、吾が旅行敢て急を要せず、婦人の下車する驛に下りしるも敢て妨げずと、某驛に於て婦人の下車するを見て、道成も又下車し車を撤ふて婦人に追尾し一旅館に投ず、木だ靴を脱するに至らず、一客あり、亦來り投ず、見れば即ち車中見るの一人なり、三人各々室を異にして宿す

深ふして道成密かに婦人の室に到り戸外より窺ふ室内燈火忽ち滅す、道成却つて便を得、徐るに戸を排して入る寢所に接するに迫む、夢中の人の男子なるに驚駭し、倉皇逃げて室外の廁に入る、廁中に人あり嗚咽の聲を聞く驚いて見れば音中の婦人なり、婦人身を震はして曰く、盜あり妾の殺害を襲ふ、請ふ妾を救へと、道成始めて聲中の人は乃ち前の男子なることに想到し婦人を慰諭し、伴ふて其室に歸らしむ而して既に前刻の人なし、道成終に目的を達する能はず、己れも亦自室に入りて臥す、翌朝婢に就て婦人の事を問へば何故か今朝拂曉出發せりと云ふ、道成飯後旅館を發して汽車に投ず、又日の一客に會す、而して互ひに語らず終に某所に到り相別る、道成其の客の何人たるやを知らずして多くの歳月を閱す、偶々日鐵の記念會の席上多數の人を見る、中に風手前日の人と酷似する者あり其人を問へば同社の會計課長某なるを知り、茲に初めて其人と握手して、互ひに往年の衝突を語り傍

○大隈侯前年川賀金澤に漫遊の日、官民の歡迎會席上前田家歴代明君あることを論じ、前田家の爲めに一辨護を試む、曰く昔し前田家は收斂を以つて名あり、庸俗動もすれば之れを以つて加自藩を難すと雖も、然らず、收斂は大政治家にあらざれば爲し得ざる事、而して收斂を行ふて、民の不平を來さざる最も難しとす、上に明君あり之れを弱くるに賢宰あらずして奈何んぞ、民心を收攬しつと收斂を行ふを得んと、一種奇譽の談聽く可し。

○近來都鄙活動寫眞流行す、而して探偵を主人公としたる者最も喝采を博す

○九州の酒造家南方常楠余と相識る、曾つて余を介して大隈侯に酒の名を命ぜんとす。余は代に候を囑す、余思へらく區々たる酒名と雖も侯の意氣を寓せざる可らずと終に「一統」の二字を撰び侯の囑に應ず、一統は一等と

音相通じ兼ねて酒造界を統する意を寓す。南方此命名を得喜び用ふ、爾後酒名大いに顯はれ販路益々盛んなり。

鯨肝録

東京翠原道人

○故陸軍中將三好秋畝新發田の兵營を督する年あり、越後の人多く此人を知る、秋畝戊辰の役津波を攻め越後に入る。當時軍幸に與へたる二三の書簡偶々余の手に落つ、中に興味を覺ふる一二の記事あり。一に曰く雪中黒羅紗の服を着するは敵の的となるの不利あり請ふ一隊數十名の爲めに白地寒冷紗の服を作れと。他の一通に曰く轉戦中刀室挿し不体甚し、如斯きものを佩し如何んぞ對馬に登稜するを得ん。願くは速かに佳刀を送り來れと、雪中寒冷紗の服を纏ひ敬彈を免れんとすること、將た登稜の爲めに佳刀を要すること、滑稽に類すと雖も當時眞率の味亦た堪すべき也。

鯨肝録

東京翠原道人

○藏書印に自づから形式あり概ね曰く「某々珍藏 曰く官爾子孫 曰く何、曰く何、語同じからずと雖も愛惜を寓せざるは無し。藏書家の心理自から然らざるを得ざるに書と要す。但た奈何せん事實は冀望に副はず、愛藏其人にべば子孫能く之れを保つなし、余曾つて先哲の印文に倣らひ藏書印を刻す其文に曰く「得其人傳、不必於子孫」と後更に「子孫換酒亦可」と改刻す、蓋し激する所ある也。

鯨肝録

東京翠原道人

○秋元家に在する記録に徴し、の價に換算すれば總工費二千萬圓、坪二萬五千圓に當る、就中陽明門は八坪許に過ぎずと雖も一坪の工費十五萬圓に相當し世界驚き斯の如き巨費莫したる建築無しと云ふ。

○故千頭重臣、酒量を以つて誇る。其酒量知事たる時、余一夕拉して行形亭に飲む、約すらく酒の輸贏を決せんと、余酒量あるも固と千頭に敵せず、窃かに妓の量ある者一二に囑して伏兵とす。千頭大杯を擧ぐるを恒とし、此夕も特に水呑コップを用ひ鯨飲時を移す。伏兵起ると雖も自若たり。余竊かに其酒量の大なるに驚ろき遠く及ぶ可らずと爲す。翌朝余醒めて平日の如し。偶々人の訪ひ來る者あり曰く今事あり知事を將應に訪問したるも出應せずと、時正さに十時に垂んとす。余思へらく勤勉彼れが如くにして、出應ざるは怪むべしと、秘かに人をして官邸を偵察せしむ。報に曰く知事公今日缺勤、昨は下駄を脱せず寢所に入る。如斯は此人に會つて無き所と、余思て凱歌を奏し倉皇書を裁して宿醉を慰問す。事は十數年前にあり、而して其人亡矣。録し撫然たり。

鯨肝録二十回千頭の頂の終り筆して撫然たり。

す、要は意外の句を取り來り意外の事充るに在り、勿論詭譎を旨とするも妙は卑陋に陥らす人を傷けず自然其間に諷刺を寓するに存す。流石に支那は文字の國、往々一讀噴飯を禁じ得ざる者あり、左に三四を抄して讀者の一笑に供ふ。

人面不知何處去 鬚多き者飲む
一生長帶水晶盤 眼鏡を掛くる者飲む
猶堪一戰立功勳 中年未だ子無者飲む
莫道人間總不知 細君を懼る者飲む
新鬼煩冤舊鬼哭 醫者飲む
爲他人作嫁衣裳 年若て妾を蓄ふ者飲む
二水中分白蠶洲 茶酒の席並ひ列なる者飲む
詞源倒流三峽水 小便に立つ者飲む
仙人掌上雨初晴 手を洗ふ者飲む

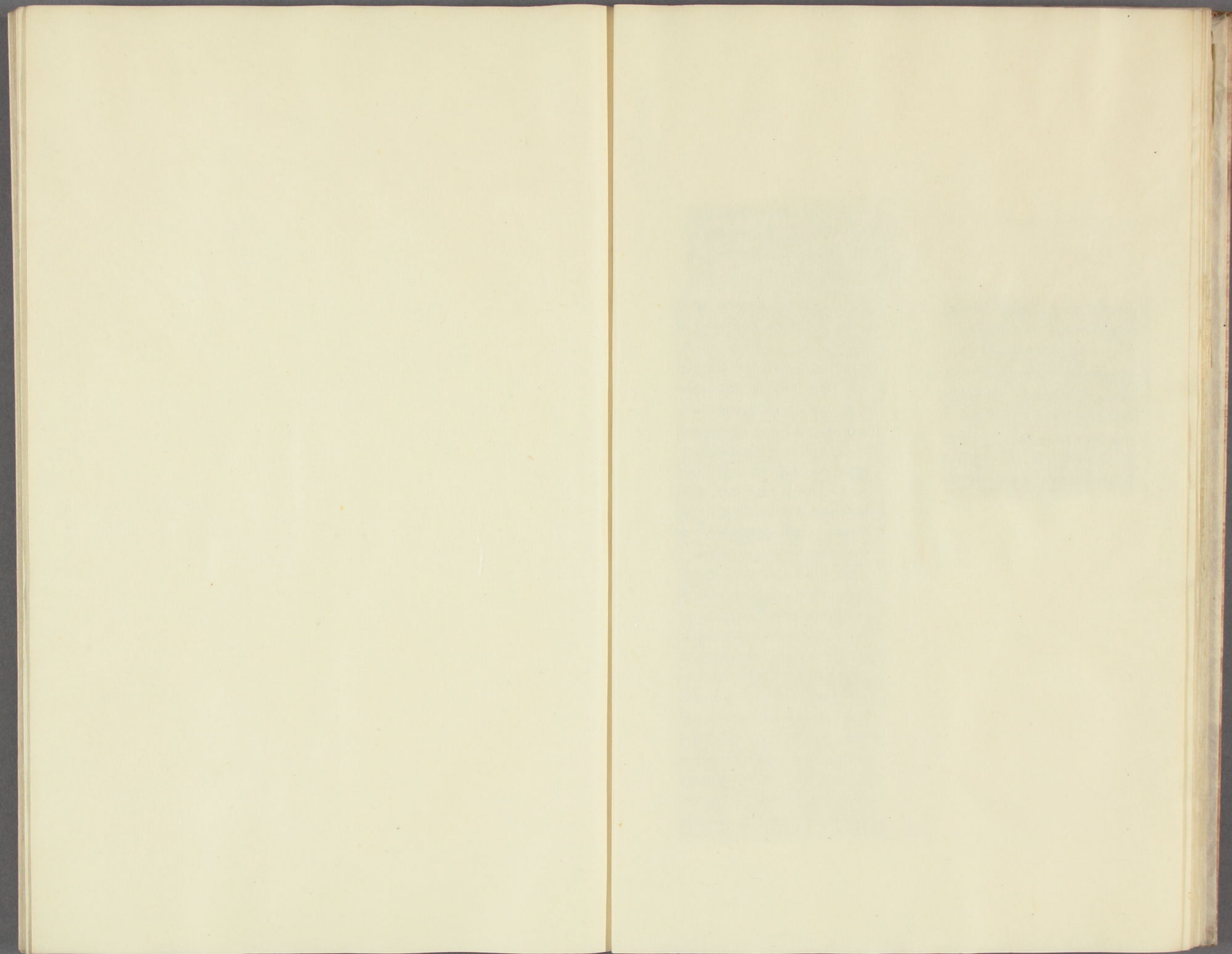
他

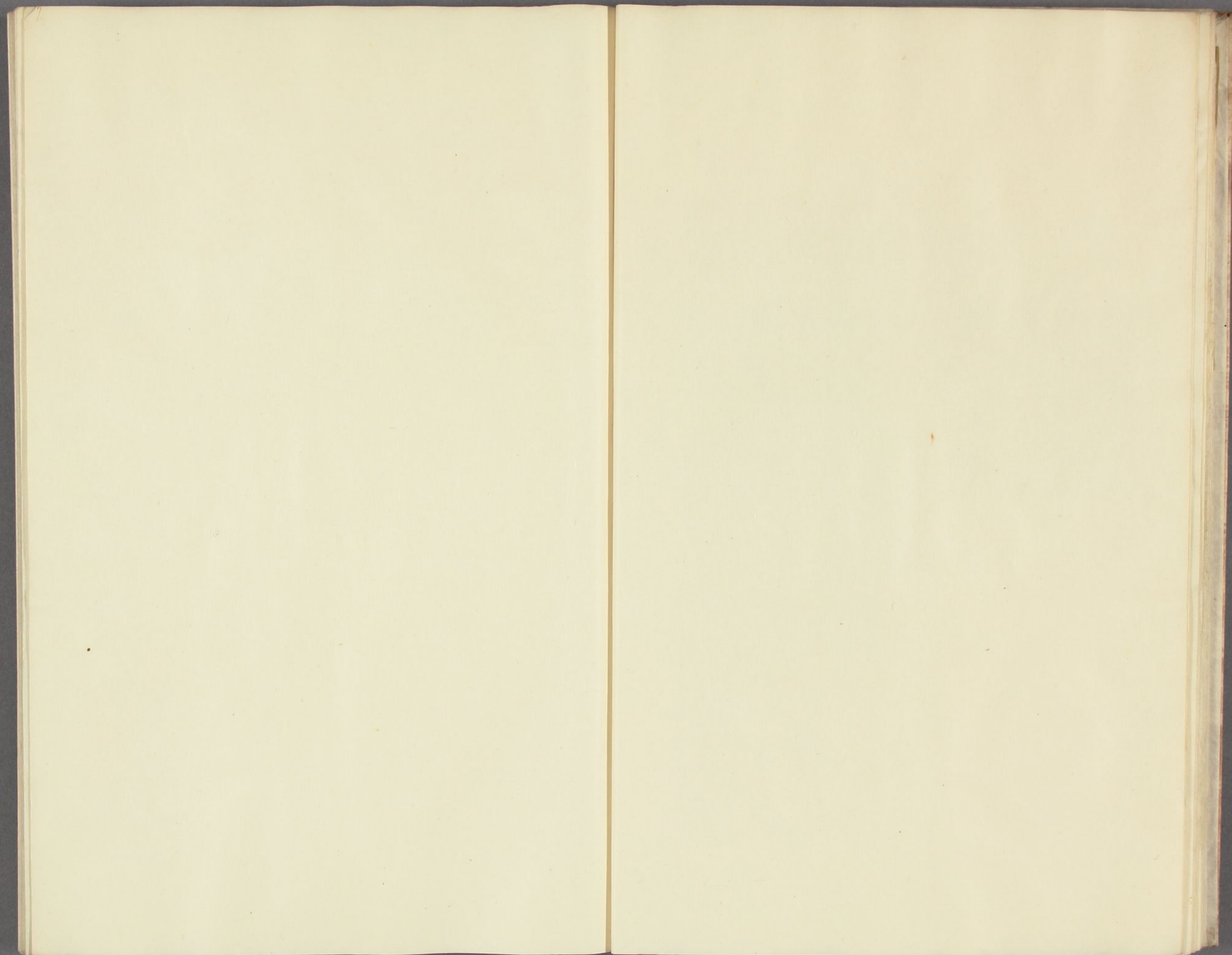
○偶々書架より巾箱本を抽き開に任せ讀む。中に「酒籌」一篇あり、籌は籤なり、各籤唐詩一句を書す。座中籤を引き其の句に該る者一杯を傾くを法とす、例へば「亂殺平人不怕天」の句を引き出せば醫を業とする客飲まざる可ら

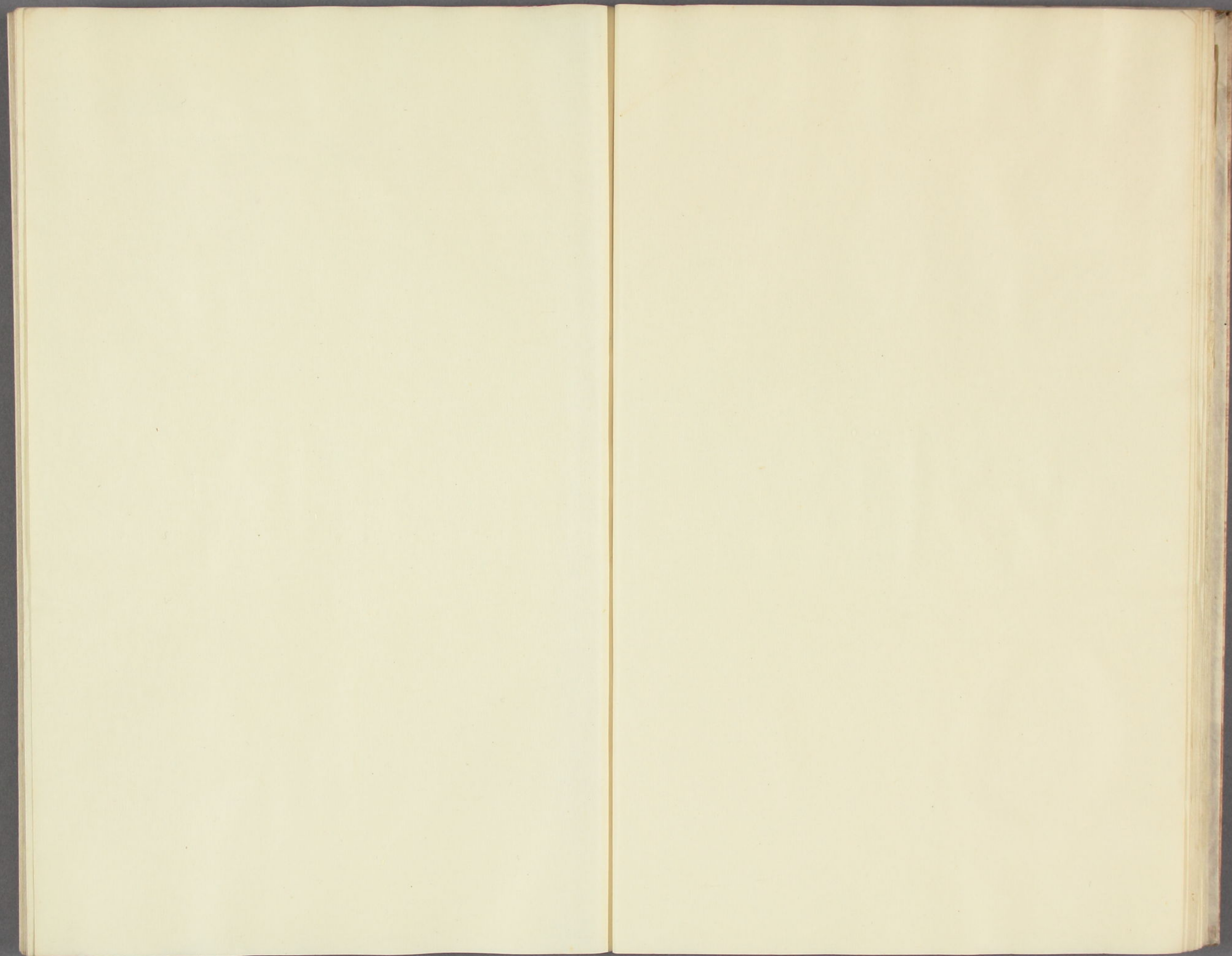
文を寄せたことがある、斯る研究は強ちわるいでも無いが他面から考へて見ると、此の七不思議と云ふ事實は極めて興味のあつた事柄である、之を學理的に一概に説破して終へばそれ迄であるが、左様すれば取も直さず趣味あり詩趣ある傳説類を抹殺する結果になるので言ひ換ふれば意外の事を意外でなくするのであるから、實は自分は無當附條りそれを喜ばなかつた、無論斯うは言ふても其人の企てた事柄が悪いと云ふのではない、唯學術的研究は學術的研究として置て、自分は別に趣味上の見地から拘りな不思議や奇蹟などは一概に打壞して丁ひたくなないのである、殊に越後の七不思議の持てる意味と云ふものは或は宗教的に或は歴史的に或は傳説的に極めて神秘的なる色彩の下に古典的事實が傳唱せられたもので、其眞價値は寧ろ學術を超した高所に在るとも言へるのであるから、それを手もなく破つて終ふのは如何かと考へらるゝ、於是乎世に神話あり、奇譚あり、意外あり、案外あり、不思議あり、奇蹟あり、三度栗あり、燃ゆる水あり、却て獅子を趣味的に解ると云ひ得るではなからう歟。

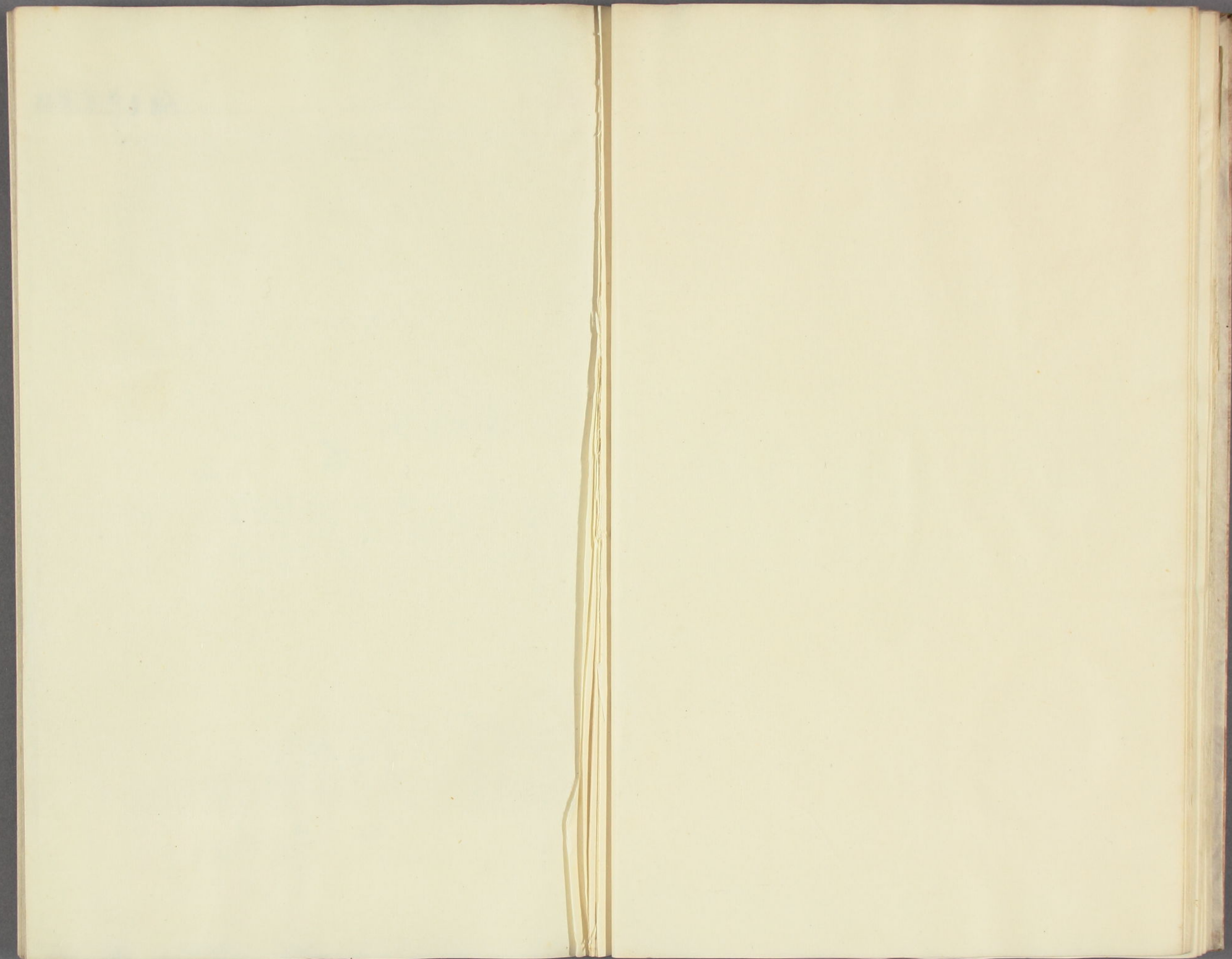
會つて越後の七不思議の事に就て詳しい科學的解説を附けた章高々自分の處へ持つて來て序文を費しと言つた人がある、此人の捕へた題目は七不思議に止まらず他の越後の不思議類を二十餘も集めてそれれ／＼に理科學的解説を附して不思議にあらざることを辯じた、目分も請はるゝが儘に當時一篇の序

文を寄せたことがある、斯る研究は強ちわるいでも無いが他面から考へて見ると、此の七不思議と云ふ事實は極めて興味のあつた事柄である、之を學理的に一概に説破して終へばそれ迄であるが、左様すれば取も直さず趣味あり詩趣ある傳説類を抹殺する結果になるので言ひ換ふれば意外の事を意外でなくするのであるから、實は自分は無當附條りそれを喜ばなかつた、無論斯うは言ふても其人の企てた事柄が悪いと云ふのではない、唯學術的研究は學術的研究として置て、自分は別に趣味上の見地から拘りな不思議や奇蹟などは一概に打壞して丁ひたくなないのである、殊に越後の七不思議の持てる意味と云ふものは或は宗教的に或は歴史的に或は傳説的に極めて神秘的なる色彩の下に古典的事實が傳唱せられたもので、其眞價値は寧ろ學術を超した高所に在るとも言へるのであるから、それを手もなく破つて終ふのは如何かと考へらるゝ、於是乎世に神話あり、奇譚あり、意外あり、案外あり、不思議あり、奇蹟あり、三度栗あり、燃ゆる水あり、却て獅子を趣味的に解ると云ひ得るではなからう歟。









に述べた通り、我が浮世繪の数は何十萬とある、其中、唐土に關するもの即ち、三國誌、西遊記、水滸傳などの類は、本より想像の産物であるが、我國の事に關したものは、殆んど寫である。殊に、繪の如きは、今日の新聞の挿畫の如き物も澤山あるし、又當時に在つても、一般人の觀る事の出來ない特殊な方面の内、風景などを畫いたものは、其の風俗を實に示すが目的で畫いたのであるから、是等こそは、後世の研究者に於ては、浮世繪の風俗資料と云へるべきであらう。

浮世繪の外に、狩野派の畫がある、併し之等の畫風は、市井向きではない、當時の風俗を畫かんとしたのではない、何れも、ある理想を立て、一切を理想化して畫いたのである。畫としての價値は別問題として、彼等の畫は、寫實でない事だけは確かだ、之に依つて時代風俗を知らんとするのは誤りである。名畫と時代風俗とは必ずしも一致すべきものでない事は古今東西の繪畫史が証明する處である。理想化された繪畫を資料として風俗を研究すると途方もない誤謬に

か

第三、主と従との轉屬

本に於て畫と文章と何れが主で何れが従であるかと云ふ意味である。勿論、本の成立から言へば、讀ませる爲めのもので、其の文章が主であるに相違ない、何故挿畫を澤山に入れたかと云ふに、夫れには、作者が文章で幾ら形容しきれぬ、形容し盡せないもの、百聞は一見に如かずの、其の趣意を、筆と墨で、其の趣意を、繪畫の力を借りて、如實の印象を讀者に與へやうとした、又讀者の倦怠を防ぎ、注目を惹き、餘計に味を付ける爲めに景物として澤山の畫を挿んだのである、其當時に在つては、作者の文が到底主たるもので、挿畫は添物であつたに違ひない。

處が後に至つては、畫家の方も大に進歩し其の靈敏、文學者と相拮抗するに至つた、其當時に於ては、文章が主か挿畫が主か一寸わからない形勢となつた。即ち見識ある繪師は、己の畫をして文學者の添物とせず、肯んぜず、作者と畫工とが衝突を來すに至

かん

かん

其の一例は北齋と馬琴の衝突である、共に之れ當代一流の靈腕、而して其の才力、互に素晴らしい見識を以て傲人、下に強の者だから堪らない、北齋は馬琴の著述へ挿畫を畫いたが、扱て之を世に發表するに當つて、繪の方を従たる添物扱ひにされる事を好まない、其の本の表題を「繪本……」と名けて繪に重きを置かせやうとする。馬琴は之を聞いて以ての外だと憤り、挿畫は文章有つて後出來たので、當然従たるものであるから「繪本」と云ふ肩書きは、と云ふ。兩雄は駁れてしがない、其處で出版元の主人が留め男となつて双方を和解するに努めたが、兩人相持して下らな最後に至り、本屋の主人に一任する。本屋の主人の方は、多く買ふ必要から、矢張り繪本と肩書をつけた、其の方が世間の氣受けが好かつたに相違ない、賣行の爲めに挿畫が甚だ重きを爲して居た証據である。

當時にあつては、斯様な形勢であつたから、今日になつては、主たる文章は閑却されて、之を讀む者は極めて少數に過ぎぬ、却て本來従たりし挿畫

北齋の挿畫は馬琴の著述より多く

土佐繪の挿畫物は、風俗研究の資料として役立つ事は確かであるが、併し此の繪卷物は、一種の風俗畫として畫かれ、出來るだけ寫實に近い物に畫かれた事と、も一ツには、同じ程の古い時代を畫いたものは浮世繪の方に無い事との爲めに、之が唯一の参考となるのである、正確など云ふ意味からでなく、他には、何等参考資料がないから、止むなく之れで間に合せやうと云ふに過ぎない。

我國に新聞の發行は徳川氏の末路であるが、其以前には浮世繪が新聞の代用をして一般に流布し、文字の代りに繪が非常の働きをした、夫れが澤山今日に殘つて風俗の資料となつて居る、此の點は世界に餘り例がない。風俗資料としての浮世繪の功は決して小なるものでない。

北齋の挿畫は馬琴の著述より多く

北齋の挿畫は馬琴の著述より多く



が、大抵、價值をもつて来た。文章は時代の變遷に依つて權威を失ふが、給調は、見る目の苦勞が少なく、古い物は古い様に特殊の趣味があつて、愛玩者は却て多くなる。之は畫は理性の伸介が少なく直感に訴へるからである。此點に關しての最も著しい一例は、哥麿の虫づくし貝盡などである。當時狂歌が大流行で狂歌師連が、各自の作を集めて、出版した。之は何れも、道楽半分の出版だから、却つて疑つたもので、精巧な繪入りにした。されば當時出版になつた狂歌集には名畫が多く挿むである。中には哥麿が書いた虫づくしなどは狂歌の縁にしたものではあるが、今日では主たる狂歌は其方除けに哥麿の虫の筆の靈活が賞讃されて、片々たる一冊が二百圓三百圓の價值となつて、そして寧ろ、狂歌が書いて無かつたらと、古臭い狂歌を蛇足視するに至つた。

だが能く考へて見ると、斯かる立派な浮世繪を後世に残したのも、本はと言へば狂歌師連の賜物である。此に於て、主と従との轉倒は一層切に感ぜられる。

浮世繪の味 版畫の味

浮世繪も最初は肉筆の儘で行はれ版に刻さん彩色などは無かつた。漸く彩色がつく様になつても極めて幼稚の者であつたから、自然畫家も觀者も肉筆に重きを置き浮世繪師の或る者は終つて版下を書かなかつた者もある。

だが浮世繪の生命は版畫に在るので其の特色を最も好く發揮したのは版畫の力である。浮世繪は寫眞以上の實寫である。實際には光線の具合や、其の象の複雑な排列の爲めに妨げられてはつきりしない處迄も、強ひて書き分けて、飽達鮮明に現はしたので、實物以上に説明的な寫眞の筆を加へて居る。其の味は神韻飄渺の趣なき趣きではない、鮮明にして一點の陰りなき處にある。



雅俗
相半錄
春城軍人談
鼠巢庵編

其の畫に關しては、手之に觸るとが如き感じを興へる。されば肉筆畫は線も色も、くつきりしない處もあるが、之を版に刻すると、一點一劃、確然と現はれてむらがなく、其の物象は愈々明瞭となる。勿論、毫髮曖昧な處がないのは其の特色である。

此の意味からして、浮世繪は版畫に一番能く折合ふ。版になると、原作よりも二段も美化される。筆で彩色すると、むらになつたり、穢なかつたりする色が、版にすると、最も豊富になり、華やかになる。

初て版畫にする。第一に紙質の選擇が、最も細密に研究された。滋味を奪ふのでなく、明るい事を喜ぶ。錦繪には純白で、ふつくりした紙が一番能く合ふ。即ち線に合ふ紙、彩色が能く乗る紙、人物の顔が、白く、肉が軟かく、紙が撰まれた、それはマサと云ふ紙である。

第二には版師の進歩が、版畫流行の大原因を爲した。浮世繪が流行するに伴て版師の技術も長足の發達をした。

浮世繪の味 版畫の味

のび画
家の満
るを得
るの味
の味

原作者の思はくを余蓋なく發揮する迄に上達した。普通、畫家は、版に我が現はれぬ事を嘆く例である。

浮世繪は、強い、はつきりした線と、華やかな極彩色を生命とするのだから、版になると一層引き立ち、原作以上に版の味が潔い。肉筆は下繪で版畫が仕上げをかけた様な關係だ、原作以外別に版畫の境地があるとでも言ひたい位だ。

つまり、之は浮世繪の線と色とは、版畫に最も適した事と、版師の技術が非常に進歩した事に歸する。他の畫風に在ては、之が行はれない素質上、到底行はれ得べからざる事なのである。かくして浮世繪は版畫となつて肉筆以上の發展を遂げ、江戸藝術の誇りとなつた。江戸藝術の大なる誇りの一つは版畫であると斷言する事が出来る。

浮世繪叢談 (6)

第五、版師と繪師

前回は、浮世繪が版畫に依りて其の特色を發揮し得た事を述べた。版に繪師と版師との關係を、一歩進んで考へて見よう。

本來繪師と版師とは、相待つて離るべからざるもの。以心傳神以て其の妙所を呑込んでかゝらなくてはならぬ。双方親密な仲になつて默會融合する様でなくては、良いものは出来ない道理である。浮世繪が、江戸藝術の誇りと云はるゝ迄の發達を遂げたのは、右の點に於て理想的の融合が成立つたからである。即ち版師の方では技術が進歩したのみならず、同じ繪師の作畫を、同じ版師が始終刻み居る間に、原作者の筆意を會得し、其の筆癖を、**逆も心得る様になつた。**

今日では版師の方にもそんな名人もなし、今の大家の畫を版にする時にも原畫を其儘板に張り付けて其上から彫る。又は原畫を寫眞にして其を板に張つて彫るのであるが、却々古い浮世繪に及ばない。夫が何う云ふ譯かと云ふに、古の版師の腕利きは、原畫を

の刻

機械的に原稿通り彫る者と思ふてはならぬ。版師は刀を以つて描く一種の繪師である。即ち北齋の版師は北齋自らの氣分で板へ畫くのである。だから北齋の筆意を最も微妙に傳へる事が出来た。其の心持は恰かも大夫と三味線曳きとが、ピツたり呼吸が合ふと言つた様なもので、版師の方では線や形をのみ見ては居ない。一歩進んで、其の精神即ち畫の魂を捕へて居る。だから出来上つた版畫は生動して来る。

又彩色の點に於ても、作者が毛筆で色を紙へなすり付ける間に、むらが出来たり、紙が毛は立つたりして、どうも、一遍でさつと刷つた様に美しくは出来ない。處が版で刷り上げたものを見ると、實に目が覺る様に鮮明に出来る。作者も時にはこれに驚嘆せざるを得ぬとがある。今日彩色の法も大分進歩したが畫家は版師の彩色の技術を見て驚歎して居ると。

浮世繪が斯くも見事なものに出来上つたのは、作者の指圖もさる事ながら畢竟は版師との間に親密の交渉があり互に好く理解し合つた結果と見なければならぬ。

其儘に板に張り付ける事は

之に就て逸話がある。先年木村嘉平と云ふ版師の名人の處へ或る人が龍和亭の畫を木版に頼んだ。然るに其人は和亭の名畫を其儘板に張られては、肉筆が失せると云ふ所から、之を可なりな畫工に映寫させて木村の處へ送つた。其人の考では、版師と云ふものは、原作を板に張つて其儘彫るものと思つて居たのだ。處が、木村は原畫の原稿を見て、之れでは彫れぬと言つて突き返して來た。

依頼者も一寸間誤つて、段々聞いて見ると、彼等版師の名人は、原畫を其の儘張り付ける事は、先づ自分で原畫に依つて板に相圖を作り、大体のあたりを付け、扱て愈よ刀を取つて彫る場合には、原畫を傍に置き之を手本として其の筆致を失はぬ様苦心するのであることと知つて始めて感心したと云ふ事がある。

北齋や廣重の畫なども然うで、版師は大体定まつて居た。長年月同じ版師が北齋の畫を彫るので、目が次第に馴れ、北齋と同化して筆致も充分呑み込むに至るのである。全体此頃の版師は

浮世繪叢談 (7)

第六、作者と繪師

浮世繪入りの本を書いた戯作者は、之に依つて國民教育、社會教育を施した大功は没却する。其に、其挿畫を畫いた繪師の功は特に作者以上と見なければならぬ。

だか、面白さ一つの現象は、繪師の方では、どうも作者よりは無學で、學問智識凡て作者に劣る。で、繪師は挿畫を畫く爲めには、其間多く作者に教へられる。本來、云ふと、作者は主として繪師は從だ。作者は己が想像を以て人物と場面を創作するとして夫れを畫にする事を繪師に依頼する。繪師の方は土臺が技術で、作者の様は學問から來るものでない。作者は頭腦の業、繪師は手先の業だ。



雅俗
相平錄

5かた いつち

松

却る
かま
た

だから、作者は自分で頭に描いてそつくり其儘の光景人物を形に現はす點に於て、給師に向つて細かい指圖をする。其場所、其の人物の性格境遇、光景と云ふものを十分に説き聞かせる要がある。給師の方では難かしくて一寸には呑み込めない、あやでもない、こうでもないで幾度も作者から小言も言はれ、説明も與へられる。之が給師に取つては手先の藝以上に頭腦を作る方の學問になる。

後に至つての結果は、世人も繪入りと云ふ觸れ込みで、本を買ふ様なものと、繪師の頭腦の差が、骨折つて作者の意を最も好く發揮せんが爲めに、作者の教を聞かざるを得ない。之が爲めに不知識教育せられ、學問智識が大いに進歩した。彼れ自ら作者に同化し、作中の人物に同化し、儼然も作者の頭腦を通じて同化したのであるから、給師も人の形を畫く丈の單なる技術家ではなく人物の性格迄も書き分け、其の表情などを顔にさながらに現はす事を心がけた。

一方作者には、大變やかましい者が

ま
あ
う
と
い
ふ
の
は
あ
ら
う
な
も
の
だ
ら
う

多かつた。何れの國に於ても、文學者の程の者は、神經質で、痒い處へ手が届く様に細かい頭腦を有つて居る。其の知るべし、之を其の注文通り畫くには、大變折れる。夫れだけ給師も頭腦が進歩し、手先の技術も随つて一層進歩したのである。

作者にも、畫にかけての意匠家が多いもの、自分自身繪筆を取る事は出来ない迄も、圖案文だけは巧者なものがあつた。柳亭種彦などは、殊に注文が難かしい方で、田舎源氏の挿畫は、全部自分で圖案をして、夫れを給師に畫かせたのだと云ふ。馬琴其他の作家でも同様であるが、種彦は非難趣味家であつた爲に行燈でも枕でも皆なそれく意匠があつたのである。大体作者は、自分が文章に苦心する間に、其の人物、場面や光景などは、幾度もくも考へ直して修飾し、自分の頭腦の中に、活きた芝居が幾度か演ぜられるのだから、挿畫とて、自分の頭腦には立派な圖案が出来て居る。給師が文章を一讀して、好いかげんに畫く繪では物足りない。其の畫を自ら作

入對
注文の
ついで

元合
の
あ
ら
う
な
も
の
だ
ら
う

珠
の
あ
ら
う
な
も
の
だ
ら
う

つて、之を給師に説明する。給師も然う聞いて見ると、自分が漫然と考へた意匠よりは遙かに勝つて居るから、頭を下げて、逐一謹聴せざるを得ない。其間には、**自然**に大變な知識を得たに相違ない。

かくして本來無學な給師も、作者の爲めに教育され、自ら筆を取つて之を畫くに當つて、其の教へられた事を反覆玩味して、己れ亦識見ある藝術家の域に達する事が出来たのである。



雅俗
相半録

春城學人談
鼠巢庵編

浮世繪叢談

第七、パノラマ式、活動式
浮世繪の全部とは言へぬが、繪草紙類、即ち繪草紙類は、殆んど、毎頁に繪があつて、事件の連絡發展が、本文を讀まずとも解る様に出来て居る。王、パノラマである、之

式
の
あ
ら
う
な
も
の
だ
ら
う

あ
ら
う
な
も
の
だ
ら
う

は進んだ意匠で、西洋も稀に繪き繪もあるが、繪草紙のごとく濃つた豊富のものは無い、これも浮世繪の誇りである。

昨今では、**日本の繪草紙**、(一)(二)の符號付きで續き繪が出る。女の體畫、活動寫真が出る様になつたが、併し古い繪草紙の様に毎頁、精細な密畫で全脚色を最後迄逐つて行くやり方は、今後とも到底復活されまいと思ふ。餘程、閑な餘裕のある工賃の廉なる時代でなくては商賣になりかねる。其の點から考へると、繪草紙類は、長く保存すべき價値がある。繪草紙の展覽會が開かれ、高價に即賣されるも、此の意味から來た事であらう。

何にせよ、此のパノラマ式の續き繪と云ふのは、實物の寫真なら仕事も樂だが、畫家が筆を以て畫くとなると、大變難かしい藝になる。同じ人物を毎頁に現はす筋もあり、而かも顔の向き様や、起居動作は其都度に變る夫れを同じ人らしく見せる爲めには、顔が、**身体**、**苦**、**心**、**を**、**要**、**す**、**る**、**幾**、**ら**、**大**、**家**、**で**、**も**、**寸**、**分**、**違**、**は**、**ぬ**、**顔**、**を**、**變**、**つ**、**て**、**畫**、**く**、**事**、**は**、**容**、**易**、**で**、**な**、**い**、**く**、**も**、**彫**、**像**、**的**、**に**、**動**、**か**、**ぬ**、**表**、**情**、**な**、**ら**

あ
ら
う
な
も
の
だ
ら
う

が難かしい中にも、口紅は際立つて
 色だから、微塵其位置を誤ると、全
 紙の廢物になる。甚だ難かしい藝で、
 手に尺度ある熟練を要する。
 上方では、人間の氣象ものいだけ
 に、氣を負ふて微細な點に力癪を入れ
 る様な事も無い。萬事安易に運ぶ主義
 だから、錦繪なども大した骨折りをし
 ない。美人の口紅などに、特に版を重
 ぬるを馬鹿けた事として、毛筆で一
 紅をさす、之は甚だ懶口な事の様で、
 氣が利いて居る様に思はれるが、併し
 藝術品として珍重愛玩する方面から云
 ふと、如何にも興の覺ゆる仕業で、祈
 角の版給を之れ一つで壞はして居ると
 も言へる。そこへ行くと、江戸ッ子は
 流石に違つたもので、版給であるから
 と云ふて唯だ一點の版を**用ふる**。
 右は、ほんの一例であるが、三十回
 四十回と彩色を重ねることは實に厄介
 な手数と費用を要する。で古
 來作者も版師も第一に苦心したのは、
 勞を省いて美果を収めたいと云ふ事で
 其れが爲めには、えらい發明をして居
 る。今日舶來の方法として重寶がられ

七
 七
 本
 人物
 描
 乃
 乃

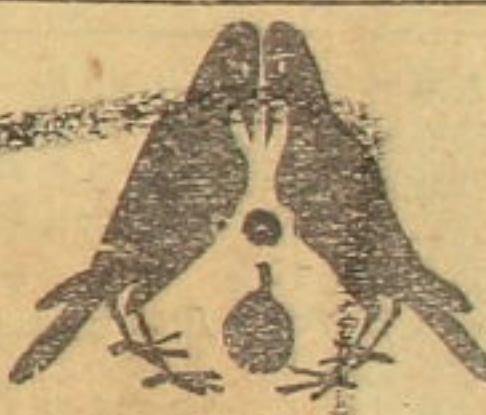
喜怒哀樂の表情が場毎に夫
 れらしく映らなくてはならぬ。
 繪草紙の内容の中には人
 間の一代記が澤山にある生れてから死
 んだの間の事、産婆の手に抱きつけ
 られた處から、竹馬に乗る年配、腕白
 盛り、元服、成人、中年、老年、臨終の境
 世衰へた顔迄、年代を逐ふて變化する
 處を書き分けるのだから生半かな筆では
 畫き終つせるものでない。而かも夫れ
 が全然家の想像で行くのだから大變
 な骨折である。畫龍點睛だことの、
 神韻飄渺だ事の、構想雄大だのと、
 家の抱負もさる事ながら、今日の畫
 にして、彼れ繪草紙の如き繪畫は論ず
 るに足らずとする人々とても、然らば
 五六十枚に亘る彼の様な活動畫をと注
 文されたら、手輕に出来る人が幾人あ
 るであらうか。
 西洋人も我が繪草紙の精巧な畫き
 けには一驚を喫して居る。元來繪草紙
 の起原は、上代の繪巻物から來て居る
 から彼等浮世繪畫家の新家とはかりは
 言へないが、斯種活動式の續き繪を、
 理想の境地迄入成した功は多とすべし
 であらう。

敬
 敬
 敬

三色版などは、早く已に浮世繪、應
 用されてある。二ツの色を取合せて、
 第三の色を出す位の事は大分古く丁
 夫されて居る。今更ら西洋の三色版
 又ほかしく云ふ事も、随分と苦心さ
 れたものである。ほかし丈けに濃淡緩
 版も重ねることは人知れず非常の勞が
 掛る。これに就ても終に一種の工風を
 生んだ。それほかすべき所を斜面に
 彫刻して勾配をつけるのである。此の
 勾配を緩く手際能く削ぐと、幾層も重ねたも
 のより濃淡の割合が自然で、美しい
 のである。
 木版は、本外云ふと迂遠な仕事
 西洋の如き國では、木版は餘り進歩し
 ない。代りに寫眞版、銅版など便利な
 ものが工夫されて、
 併し凝つた美術用としては到底、我が
 木版に及ばない。木版術は、我が國獨
 特のもので云ふてもよい。西洋人が、
 我が浮世繪を珍とするのも、一ツは此
 の木版術から來た特色が彼等の目にお
 もしろく感ぜられた爲めである。折角
 是迄發達した世界の珍たるべき木版術

摺
 摺

雅俗
 相半錄
 春城學人談
 風巢庵編



第八、版師、彩色の研究
 浮世繪、版師の苦心は前に述べたが
 あれば繪師の原色を如何に濃淡するに
 就いての工夫、
 事なまた、茲には版の彩色の研究に
 就て語らう。
 已に版が出来た所で、次の順序は之
 を刷つて色を付ける事になる。之に就
 て、版師の苦心と工夫は、並大低な事
 でない。錦繪の如き精巧なものに至つ
 ては、其の彩色に三十回四十回の版を
 重ねたものも珍らしくない。
 今の人は意外に感ぜんが、美人畫の
 口紅の如き、ほんの一小點に過ぎない
 ものを、特に一枚の版を用ふるのであ
 る。口紅の色は、一種異つた色で、
 他の赤など、同時に、事は出來
 ない、そして顔の彩色は、一番手加減

江
 の師摺

を廢して了ふのは惜いものである。是丈は何とかして保護すべきものである。永



雅俗
相半録

春城學人誌
鼠巢庵編

浮世繪叢談

第九、役者の浮世繪

浮世繪畫家が、モデルにし若くは理想とする處は、何んであつたかと云ふと多くの場合、芝居の役者が未だであつた。
今日に在つても、婦女子の趣味は第一に芝居である。昔々娛樂機關が今日の如く多種多様でなかつた。芝居が觀せ物に過ぎず、世間では、芝居は一番面白く、そして、日常の噂も芝居の噂を切つた位である、そこで浮世繪も舞臺並に俳優の演技を其儘描したのか實に澤山ある。又はやり役者の似顔を描したのも少なくないが、舞臺を離れて美男美女を描くにもモデル

概

或は情婦や近隣の美人なことをモデルにするものもある。だが舞臺の美人は一番書き好く、又人氣に投ずる處から、多くモデルを之れに取るのである。
自然某繪師の美人の顔の特徴は、某女形の顔であると云ふ事になる。後世美人畫に就いて、筆者の鑑定をする場合に、其の顔の特徴を察し、以て其作者の誰たるかを斷するに苦まぬ譯も其の標本とする顔が略々一定して居るからである。小澤の美人畫は低一定した女主人公を描く様な傾向があると同じく、畫工に於て、
芝居で人形を使つた時代には、人形を理想美として活人が人形に倣つたこともある。随つて浮世繪師も人形然たる美人を書いた。いつも舞臺の流行の源泉である、活人は人形を學ぶ、さて活人によい處があると、人形の方でそれを取る。かくして舞臺と社會とは互ひに眞似合ひ互に取合つて競争する。浮世繪に兎もすると人形振りの美人のあらのは此故である。

ひも同
から

取り

俳優に倣つた。浮世繪師の畫く男女は幾んど役者の似顔で無い者は無いと云ふてもよい。俳優は美化された人間であるから之れをモデルに取ることは東西同様である。殊に日本の美人繪もモデルを女形に取ら、事情がなせと云ふに日本の女は皆な矮小であるから寫眞の繪では引き立ぬ。女形は男優であるから其の短を補ふことが出来る。浮世繪師がモデルを女形に取り美人繪を書くのも偶然でない。されば或る時代の錦繪に非常に長幹の美人がある。幾んど寫實と信ぜられないほど長幹の美人が畫いて、此等は女形を描したものと解し、貼め七譯がわかる。
元來、繪師も、全然空想の美人を畫くと云ふ事は出来ない。多くは手近かく見馴れた意味から、我れ知らず自分の妻をモデルにする。夢二の畫く美人は自分の妻がモデルなどである。其の無理はない。其他多くの畫家は、自分の妻に似た美人を畫くと友人からひやかされる経験があらうと云ふもので、之は見馴れた處から、我知らず似た顔を描くのである。

されば芝居を離れて浮世繪を知りたしと言つたもので、繪師の方では、寫實は寫實なれども、美化され、舞臺化された寫實である。芝居は醇化して表現する舞臺である。當代の粹を集めて多少の註釋誇張さへ加へて居る。故に浮世繪師の美人畫も、市井に散見する眞物の女ではない。之を以て、其の眞實な風俗の資料とする事は早計である。其間には、芝居氣を混じて居る。云ふ事を注意しなくてはならぬ。乃ち芝居にはいろ／＼工風されたるシガサがある。舞臺面を活躍させる必要から來たものであるが、浮世繪にはつまりそれを多く取つて居る。されば風俗などを考へるときには此等の事に十分の注意を要する。

大もひの若作と
2の為

の時吉又直

ハリスの種特ぬるハリス

第九、浮世繪師と春畫
 世界各國の春畫は、特色を有して世界に例なき發達を遂げた。其の特色は、例なくとも、中には、寫實的であるものも、一部を特種に發揮する特徴を有するものもある。

或は一部を擴大して全体の平均を失ふを難する者もあるが、實は春畫其物の意味を考へない野暮な評である。敢て春畫に限らない事だが、西洋の名畫などにも、要部に重きを置き之れに力を集中しすべし他を省略する例は澤山にある。日本の春畫も之れと似た筆法で進歩した工夫である。

切て春畫と浮世繪師と云ふ題目は、何の必要あつて掲げたかと云ふに、春畫は日本の裸體畫であるからだ。短見者流は日本に裸體畫が無へなど、林い事を云ふが、是は誤つて居る。春畫こそ我々特有の裸體畫である。そして春畫は、主として浮世繪師の領分であつた。春畫の特色は、畫道の方から考へると、其の線と形にある。春畫が生

いた様に思ふ。男女の骨格なり、肉附きなり複雑なる曲線の使ひ方なりが、これのために尤もよく習作し得らるゝからである。當時の畫家の春畫が畫かぬとありては、恥辱と心得た位である。ドンナ大家でも皆な内くに書いて居るもこれが爲めである。

若し夫れ、川故に通じ、色道を卒業した大悟的の趣味眼を以て春畫を觀たとしたら、普通の畫には到底見られぬ線の妙味、姿態の變化、複雑を認め得らぬだらう。之を畫道すけから見ると春畫は大變難かしいもので、他の畫の基礎となるべきものである。春畫を立派に畫ける畫家は、人物畫きとして一人前の畫家である。春畫位、長い曲線を一筆に流みなく用ゐる場合は他の畫にはないのである。運筆の自在、筋肉の力の入り具合など、技術の上に於て是程難かしい畫はないのである。勿論春畫にも巧拙さまさまあり、殆んど論ずるに足らない様な下品もあるが、以上は大体に就いて言ふたのである。

第十、あぶな繪
 春畫に就て聯想するとは、あぶな繪である。之は、名稱の如く危ない繪で、際どい處を畫いたものを云ふ。能く繪の中に向脛を露はした繪がある、あれがあぶな繪の一例である、あぶな繪には、其の程度が様々ある。中には如何にも自然なものがあつた。例へば兩國橋を渡る美人が雨風の爲め裾を吹き亂されて白脛をあらはに現はして居るなどは自然の趣を捉へて居る、併し中には極めてだらしない不自然のものがある。例へば、股以下全部を露出して居る様な繪も

きて來るのは、其の曲線の巧拙にあつて、曲線の使ひ分けが一番必要である。線の習作としても絶好の題目である。又春畫の姿態、体格、錯綜を極めた格好は、難かしい筆の練習になる。又其の濃淡な趣きは、線と影の練習に當り、單に獨立した裸體畫では畫家も實が入らぬ。出来上つたものも生動しない、春畫は此の意味に於て裸體畫の頂點である。

唯だ卑猥に屬する爲め風教上、排斥を受けて居るが、藝術から見ると畫家が筆を練り腕を磨き、藝の地下を作るに、非常に大切な事であつた。どうせ浮世繪師は人物を畫くに當つて、先づ赤裸々の體格を心得、之に衣裳を着せなくてはならぬ。浮世繪は主として人物風俗を畫くのであるから、裸體畫の研究が居りて居ないと、到底活きたものは書けない。要するに、春畫は浮世繪の根本を爲したものと云ふてもよろしい。

當時如何なる大家も一たびは春畫を試みた。浮世繪師にあらざる應舉なども随分書いて居る。敢て賣る目的でなく、人物を描く研究の爲めに書

第十一、あぶな繪
 春畫に就て聯想するとは、あぶな繪である。之は、名稱の如く危ない繪で、際どい處を畫いたものを云ふ。能く繪の中に向脛を露はした繪がある、あれがあぶな繪の一例である、あぶな繪には、其の程度が様々ある。中には如何にも自然なものがあつた。例へば兩國橋を渡る美人が雨風の爲め裾を吹き亂されて白脛をあらはに現はして居るなどは自然の趣を捉へて居る、併し中には極めてだらしない不自然のものがある。例へば、股以下全部を露出して居る様な繪も

あぶな繪

ある、閨房の繪などであれば不思議はないが、途上歩行の繪にコンナがあるから爾暴である。

なんであぶな繪が出来たかと云ふには際どい一種の美を狙つたものであらう。丸むき出しの裸体は最初の一瞥見こそ強い衝動を興へるが、蓄がないのから、直ぐに見飽く。ゆつくり賞玩する程の持久力か乏しい。そこで多少肉的に、際どい處を見せ満を持して發せざる姿態を呼び物にしたのが、此のあぶな繪である。之は幾度見ても悪感を超す迄には行かない。其の自然らしく出来たものなどは、生動する美が溢れて一種の趣味もある。

此頃或る雜誌に「ある時代には、帯を絞くして、緋縮緬の蹴出しより股以下を露出し公道を闊歩して粹とした事象がある」と書いて居た。是等は繪を見て其の真似をしたのか繪をそれを描したのか、よくわからぬが繪と人と互ひに取り合つたものと見るが穩當であらう。

我邦の風俗として衣服の作り方が自

然脚部をあらはす様に出來て居る、西洋の習慣から云ふと不仕末かも知れぬが日本服の生命はここに存すると云ふても宜しい。婦人がわざとでなく、白肌を露はすのは美である。日本人が習慣と美とするばかりではない、西洋人もこれを見て美と感じて居る。そこで西洋でも追々之れに倣らひ、佛蘭西あたりでは女の袴の兩側を裂き身体が隠れる様に工風したのが、既にジャレ者用ひられ夫れが一種の美として騒がれて居る。斯様な點は東西共通、人間の鑑賞に變りがない。

外國の風俗は嚴肅であるが、それが文明の假裝であつて實際西洋にもあぶな繪が澤山有る、夫れが何れも露骨でなく、自然の間にユーモアを加味したもので、例へば、舞臺女のダンスを觀る見物が、前の席を争ひ取つて下から覗き上げて居るとか、婦人が裸体で寢室に液腸をして居る處へ、不意に人が來たとか、如何にも自然な響きぶりの多い、佛國版のあぶな繪果が、坪内逍遙比の許に在つたのを瞥見したが我が國の比べて巧みではあるが、却て重苦しい感じがある。佛國人の趣味が、日本人より濃厚で複雑だからでもあら

全体

肉

う。此等の繪は十四世紀乃至十五世紀あたりを主とし今日に至るまでの者が集めてあるので、西洋でも所謂あぶな繪が無い譯ではない、唯だ西洋人は、文明の体裁上、醜を蓋ふに力める、一概に我があぶな繪を見て野蠻だと思ふは野暮な沙汰である。



第一二、模様彩色の研究

浮世繪は彩色の美を極めたものである事は前段で略々盡されて居る。其の彩色の豊饒にして複雑、各種の色を巧みに用ゐた點に於て、他の畫及びも付かない。

今百種の美人畫を集めて見るとして其の模様は、百種百様何れも異つて居ることを發見するが浮世繪師の意匠の豊富なるには驚嘆を與せざるを得ぬ、

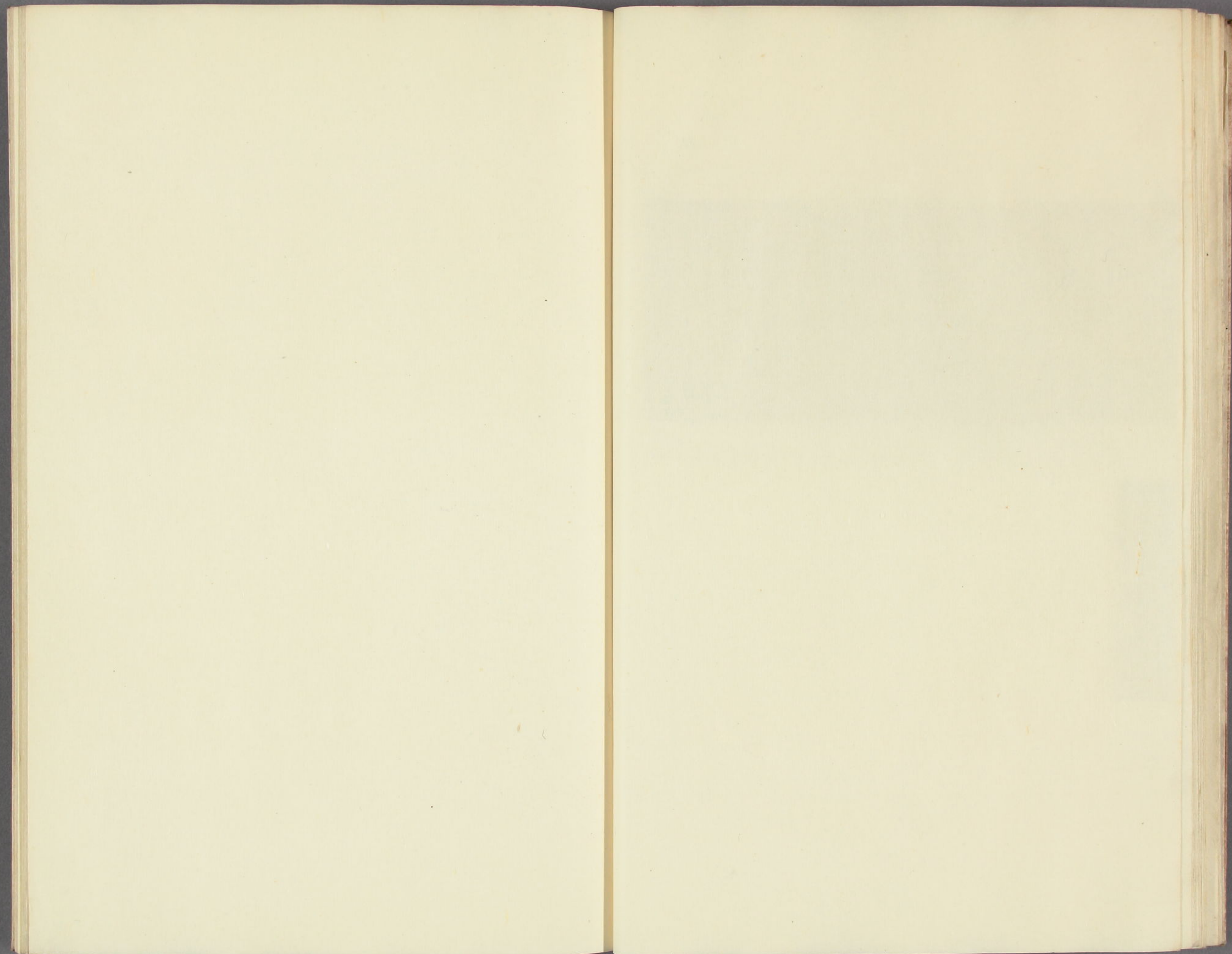
畫が、當時如何に彩色と模様と苦心し新奇を競ふたかは之で見て解る。云ふまでもなく浮世繪の骨は線で、肉は姿態で、皮膚は彩色に當る。大体、必要から言へば、線や姿態が精神であるが、一般世人の目を樂しましむるは、の皮膚たる彩色と模様である。世の中は萬事色だ。

但し、浮世繪も最初起つた當座は、彩色の無い時代もあつたが、之が市井の藝術として流行するや、畫師の方で時尚に投じて彩色の工夫を爲し、先づ單彩を施した。之が一層受けたから彩色術が一層工夫され、追々には、各畫家の間で彩色の競争が猛烈になり、随つて模様も多様に工夫され、是又各畫家の間に競争が始まり、思ひ／＼必死の工夫を凝らした。

前にも言ふた通り美人繪の衣裳の模様はそれぞれ異つて居つて、其の意匠の豊富なるは世の標本とするに充分の値があるのに、これ迄餘り人が注意せず折角畫師の苦心慘愴の結果を没却し模様と言へば必らず光琳に趨つた吳服屋が、意匠を考へるに今日でも主として平琳ばかり参考して幾んど此範圍を

脱した模様は無い位である。光琳、勿論模様にかけての天才で、其作は群を抜いて居るが、彼は唯だ一人の力だ。傑作、傑作でも多種多様な力の及ばざる處である。一方浮世繪師は、大勢で競争し工夫したので、其の類の多い事は實に驚くべき者である。私の知人浮世繪の研究家たる小林文七氏は、近來此の點に目を付け、種々の浮世繪から模様を時代別に分類して細かい處を一定の大きさに擴め、模様の譜を作つて居る。漫然看過すると、皆な同じ模様の様に思へるのが、能く見ると、其の人物と其の風体に調和を自つ爲めそれ／＼工風されて間接に當時の流行や嗜好をも窺ふことが出来る。小林氏は此處に興味を見出して、根柢を集めて居る、己に今日迄に出たたゞでも何千と云ふ模様を數へる。唯々模様ばかりでない、三十回四十回刷りと云ふ色彩の種類も又多數である。一枚に四十色あるとして、他の一枚は又別摺の色が多分に加はつて居る。模様程多くはないにしても色の調合も随分苦心したものである。之を圖譜に作つたのを見るとこれ又驚くほどの者である。是等は、工藝上の參考として

將來の爲め、裨益する所が多からうと思ふ、是れも亦浮世繪の誇りとすべき事であらう。



以下全て
白紙

適用御書内容
店紙屋馬相
辺牛京東
40

